【令和6年「土地月間」作品コンテスト_エッセイ部門】

〈 優秀賞 〉生まれ変わった空き地

高浜楽生

僕は離島に住んでいる。この島は、コロナ禍の時に気軽な旅行先として人気になって観光スポットが増え、おしゃれなカフェやグランピング施設などが建つようになった。

そんな離島にある僕の家の隣には草木に覆われたボロボロの空き家があった。また、その間の狭い道を通った先には広い空き地があり、僕は幼い頃からその空き地を遊び場にしていた。

特に、コロナ禍で学校が長期休校となった小五の春、僕と兄は毎日、空き地で野球をしたが、バットで打ったボールが空き家の方へ飛んで行くことがあった。ボールを取りに行くと、空き家には木や雑草だけでなく、あちこちにクモの巣が張られ、スズメバチの巣まであったので、半袖半パンの僕はとても取りに行けなかった。その後もボールはときどきそこに飛んで行ってはなくなる一方で、キャッチボールしかできなくなり、とうとう外遊びをしなくなった。楽しみを奪われた僕にとって、この汚く危険な空き家がじゃまで仕方がなかった。

そうして、しばらく経ったある日、驚くべきことが起こった。なんとあの空き家が取り壊され、目の前には美しい海が広がるようになったのだ。僕は爽快感と嬉しさでいっぱいになり、再び空き地で遊ぶようになった。

しかし、翌春には、空き地の跡地一面に雑草が生え出し、それが夏には胸の高さまで成長した。前と同じようにボールが飛んでいくと、探すことができなくなるので、また遊べなくなってしまった。

ところが、最近になって、大きな変化が現れた。たくさんのダンプカーやショベルカーが出入りし、大規模な工事が始まったのだ。親に尋ねると、絶景を活かした別荘が建つらしいというので、とても驚いた。それよりも嬉しかったのは、広い道が付き、きれいに造成されたあの思い出の遊び場が、胸を張って喜んでいるように見えたことだ。

この経験から、僕は、土地は何も手入れしないと荒れ果ててしまうけど、手入れすると見違えるように生まれ変わるものだということが分かった。

今、日本では、きちんと管理されていない空き地が増えて問題になっており、これを解決するために法律まで変わったらしい。持ち主の一人ひとりが責任を持ち、適切に管理をすることは、サステナブルな社会の実現に繋がることだと思う。少子高齢化などのたくさんの問題があると思うが、未来の日本がそれを乗り越え、更に素晴らしい場所になることを僕は強く願う。